２０２０年5月17日　出エジプト記３３章7～１１節、ヨハネ福音書１６章２５～３３節

説教「キリストの勝利」

高橋克樹牧師

ヨハネ福音書１６章２５～３３節は、１４～１６章の告別説教の最後の部分にあたります。この3章においてイエスは自らの死と退去が弟子たちの益になることを何度も強調します（１４章２８節、１６章7節）。イエスのこの世での死と退去によって、現実の古い秩序は裁かれ、平和と喜びがそれにとって代わられるからです。イエスは１６章１６節以下で、イエスの死の結果として信仰共同体内に起こるであろう終末的変容を伝えるために、旧約聖書の出産の比喩を持ち出す。それは弟子たちに対して、新しい民として悲しみを喜びに変えていく力が与えられていることを示すためです。そして、２３～２４節でイエスは弟子たちが終末的な喜びにあずかることについて、２つの約束を与えました。①イエスの復活とその後のパラクレートス（聖霊）の派遣によって、弟子たちは終末的な喜びに満ちる。そのしるしは弟子たちの質問がなくなることで明らかになる。②イエスの終末的喜びは、弟子たちの祈りに神が応えられることで明らかになる。なぜなら、それは神の子イエスと父である神との関係を、弟子たちが完全にイエスと共有することになるからである。この２つの約束は1世紀末のヨハネ教会においてイエスの臨在が信じられなくなっていた信仰者がいたからである。そのために、イエスの退去後の聖霊の働きに対する疑問が生じたのです。その疑問に応えることが、本日のテキストの執筆目的なのです。キリスト者が新しい民とされたしるしとは、弟子たちがイエスと同じように、神が彼らの祈りを聴かれるという完全な信頼において達成されるからです。２５節の原文では、将来は明確に神について『父について明らかにあなた方に知らせるであろう（未来形）』という宣言になっています。ここでのイエスの約束は一般的な約束ではなく、イエスが神を啓示することについての特別の約束である。『イエスの時』（＝十字架刑死、復活、昇天）とは、イエスによる神の啓示が完成し、そのことで信仰者が神に接近する道を見い出すことにある。２５節の『知らせる時がくる』の「知らせる」「告げる」（アパンゲルロー）は未来形なので「告げるであろう時が来る」と訳すべき。これは１６章１３～１５節におけるパラクレートス（弁護者としての真理の霊）の未来の働きを描くために用いられた「彼は告げるであろう」（アナンゲルロー）を受けている。パラクレートスの働きは、イエス不在のときにイエスとイエスの業を現在化させて、教会としての信仰共同体を導くためのものです。そして、１６章7節によるならば、パラクレートスはイエスの業が完成されてからこの世に送られるのである。イエスによる神の啓示が「はっきり」する「時が来る」のは、イエスが神である父の許に帰る時である（１３章1節）。神について知らせる「時が来る」というイエスの約束は、イエスが昇天したあと、神の意志を告げるパラクレートスによって実現する。

さて、イエスが私たちの罪のため十字架にかかって死んでくださったことで、私たちの罪が赦され救われたという救済論的な信仰の視点からみると、神の被造世界に苦悩や悲しみが依然として存在することは納得しづらいことです。「全知全能の神が創造し、イエスが贖ったこの世界に苦難が満ちているのはなぜか」とは、よくあるキリスト教への疑問であり批判です。しかし、イエスは『あなたがたには世で苦難がある』（３３節）と、救われた者が生きるこの世にあっても、悲しみや苦しみ、不安、偽りが依然として存在することを指摘しています。１６章１６節以下をみても、弟子たちは互いに疑問を口にするだけで、その混乱ぶりがわかります。このことはイエスが十字架上で死に、神のもとへ行くという「イエスの退去」の意味が依然として弟子たちの理解を超えていることを示しています。弟子たちは、どうしてイエスは神のもとへ退去するのか直接に問えません。ですから、イエスはこの世での悲嘆の意味を明らかにし、その解決に向けて弟子たち

の視点を変更させていきます。『あなたがたは泣いて（クライオー）悲嘆に暮れる（スレーネオー）が、世は喜ぶ』（２０節）と。イエスの小野よからの退去という悲嘆と、この世の喜びを対比させ、さらには、『あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる』（同）と、悲嘆の真ん中を通過することで、弟子たちの悲しみが喜びに変わっていくことを約束するのです。この世における悲嘆と喜びが逆転していくことは、この告別説教の最後の言葉『わたしは既に世に勝っている』（１６章３３節）に収斂していくのです。弟子たちはしばらくすると、イエスの十字架上の死によって別離しなければならず、やがては愛するイエスの死を受け入れて、この世で生きていかなくてはなりません。この世における悲嘆という現実は、人それぞれに強烈な悲嘆の内面化の作業を促します。この悲嘆の営みはグリーフワークと呼ばれるものです。実はグリーフワークが失われたものをいとおしむ心を生まれさせ、「満たされた生」をもたらすのです。これはイエスが教えつづけた神の国の姿の一端なのです。そこでイエスは弟子たちが経験する現在の悲嘆と未来の喜びの関係を具体的に説明するために、短い譬えを語ります。２１節では、母親の出産が苦痛と喜びのバランスを変えるという譬えでもって、悲嘆と喜びが逆転していくことをわかりやすく説明し、出産の隠喩で神の救済の到来を描いています。苦難から新生の喜びへと転換する神の民の経験を生き生きと描くのです。２１節を丁寧にみていくと、前半で「女は産むとき、苦痛を持つ」（直訳）とありますが、この「苦痛」（リュペー）は普通出産に用いることはなく、感情的な苦痛を表わす言葉です。女性の出産を「彼女の時」（直訳）と表現しているが、この「時」の用い方は終末の時を明らかに意識しています。さらには、「生まれたことの喜びのために苦難をもはや思い出さない」（直訳）の「苦難」（スリプシス）は神の国の到来に先立って教会が耐え忍ぶ苦難を表しています。このようにみていくと、イエスは十字架刑死によって教会の中に起こる終末的変容を伝えようとしているのです。弟子たちはイエスの退去のあと、一旦は悲嘆に暮れるが、しかしその悲嘆は弟子たちが新しい民、喜びの民になるために通過しなければならない必然であるのです。

２

イエスが言及した「世」とはどのようなものでしょうか。１７章では『わたしは彼らに御言葉を伝えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世に属していないように、彼らも世に属していないからです』（１４節）と言っています。イエスを受け入れないこの世は、よこしまで曲がっているのです。だから、ヨハネ福音書は冒頭で『その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかった。言は、自分の民のところへ来たが、民は受け入れなかった』（１章９～１１節）と、この世がイエスをどれほど強く拒絶するかを描くのです。このような世にあってイエスが拒絶され、敗北するのは当たり前です。

しかし、その敗北こそがイエスが「まことの光」「真実な言」であることの証しとなるのです。暗闇に一条の光が射さなければ、この世が暗闇であることにさえ気づかない。だからこそ、十字架刑死というこの世での敗北を回避することはかえって「まことの光」「真実な言」であるイエスを拒絶することになるのです。十字架刑死という苦杯を飲みほすことが勝利となるのです。そこでは、十字架刑死という敗北こそが真の勝利となるのです。そのためにイエスの弟子たちはこの世での悲嘆、苦悩という敗北の中に勝利を見なければならない。十字架の死を通して復活を見なければならないのです。つまりは、イエスの十字架刑死の中に働き給う神の関与のしるしを見なければ、私たちはこの世の悲嘆に埋もれてしまうのです。「わたしは既に世に勝っている」という言葉を語ったイエスは、直前で「あなたがたが散らされて自分の家に帰ってしまい、わたしをひとりきりにする時が来る」（１６章３２節）と語っています。これは十字架上の死を敗北と認識する者たちの姿です。神不在と思える時に、神の勝利を見いだす力がいま私たちに求められているのです。